

## ⑪マスコミ・出版界における差別事件

『週刊ダイヤモンド』二〇〇七年一月二〇日号での問題表現に関わって、部落解放同盟中央本部はダイヤモンド社と二度にわたる話し合いをもった。話し合いの結果、編集部、被取材者からの謝罪文とともに、同誌二〇〇七年七月二一日号に、以下のような「訂正とお詫び」が掲載された。

「本誌一月二〇日号の特集「ゼネコン自滅」中、桑原耕司氏の発言内容として、「低入札で問題があるとしたら、倒産寸前なのに着手金を目当てに入札する企業、そして、極道、同和系などの企業が受注しているケースだ。それらの会社は徹底的に排除したほうがよい」（四五ページ）との記載がありました。また、同特集において、「大阪では、建設業者と手を結ぶ暴力団が数多い。癒着の原因は、工事妨害などのトラブル処理がいちばん大きく、同和や右翼が現場に入ってきたときも暴力団に依頼する」（四六ページ）との記載がありました。これらの記載は、部落差別撤廃に取り組んでいる団体・運動と、不当な要求を行なう「えせ同和行為」との区別をせず、一般的に同和団体が入札制度を悪用し、また、工事妨害などを行なうかのように誤解を与えるものであり、同和団体・運動への予断や偏見にもつながりかねない表現であるものと認識しております。弊社は、上記各文を削除して訂正するとともに、同和団体や関係者、および読者の方々に対し、謹んでお詫び申し上げます。」

『テレビブロス』四八九号（二〇〇六年六月二四日号）で、カンヌ映画祭でのレポート記事に、差別的な表現が掲載された。プレスの中にも階級社会があり、午後からの試写にはいることができない黄色いプレスパスの自分を卑下する表現として「午後からは黄色いパスのエタヒニンは全くお呼びでない感じ」と書いたもの。二〇〇六年八月九日午後、東京・中央本部でこの事件にかかわってひらいた話し合いで、この文章を書いた外部のフリーライターは、「エタヒニン」とは江戸時代の身分の一番下にあるものとのイメージだった。今も部落差別がある、ということは知っていたが、それと「エタヒニン」がつながって理解されていなかったと述べている。また『テレビブロス』の発行元は、部落問題も含めた人権問題に対して社内研修などもない実態を明らかにし、紙面チェックのセクションも今回の問題を見逃したことを説明した。

一月九日の二度目の話し合いで、発行元は、この事態を招いたのは「『差別問題・人権問題』に対する認識があまりにも不足していた」ためであるとし、「差別・人権問題は単に用字用語の問題として避けるべき事項という意識を改め、一人一人の現実の問題として受け止めるべく、全社員の意識を高めていきたい」と述べ、社内での「差別・人権問題委員会」の設置を掲げた。また、ライターは「問題意識の確認から何を生み、何をアクションしていくか、だ」として、「メディアでしてしまったミスは、メディアで償っていくのが筋だろう」と、自らの問題として人権問題に積極的に取り組む姿勢を示した。この話し合いを受けて、『テレビブロス』五〇一号（二〇〇六年一月九日号）に「お詫び」が掲載され、一連の取り組みとしては終了した。

テレビ朝日系列で二〇〇五年一月に放送された「サンデープロジェクト」で「食肉のドン五〇億円の犯罪一政・官・財利権構造」と題してハンナグループの代表をとりあげた番組の冒頭での部落差別発言事件について、「サンデープロジェクト」では翌週の放送の冒頭で謝罪をし、以後、テレビ朝日、朝日放送、田原さん、高野さんはじめ関係者と話しあいを重ねてきた。制作したテレビ朝日、朝日放送からは二〇〇五年一月七日にもった糾弾会で、部落解放同盟の指摘をふまえた今後の決意などが示された。

二〇〇六年二月一六日には、東京・中央本部で、おもな発言者の田原総一朗さん、高野孟さんが出席し、取材にあたった大谷昭宏さんと、制作したテレビ朝日、朝日放送関係者も同席して話しあいをおこなった。

田原さんは、部落問題をとりあげないマスコミの「タブー意識」を批判するつもりでとりあげ、発言したものが、ことばが足りずに逆に被差別部落に打撃を与えるものになった、責任を感じていると反省。高野さんも、軽はずみでことば足らずとあらためて見解を話し、謝罪した。

部落解放同盟からは、組坂委員長、中執委構成役員一三人が参加。冒頭、組坂委員長があいさつし、この場ができて大変よかった。お互いに人権感覚はみがいてないとサビついてしまう。日本のテレビ界、言論界をリードする立場の人の発言は、一言一言が大きな影響をもつ。胸きんをひらき大きな一歩をとよびかけた。

話しあいでは、放送冒頭の発言内容を確認。発言の意図や受けとめ方、受けとめられ方などで意見交換、大谷さんも、二人は部落問題をもっとも理解しているのに残念な結果になった。番組で一回おわびしてもどれだけ伝わったかなと反省している。組坂委員長の指摘した、人権感覚をとぎすます必要があるということはお互い確認したいと応じた。